

お伽話。遠い昔の記憶。わたしはあなたのために目を覚ます。今日この日、この選ばれた日。あなたが物語をその血にかけて欲するよう、わたしはあなたの臓腑に纏わるあなたの物語を欲している。語られないで死んでしまう物語などあるのだろうか。世界を埋め尽くす物語を、絹糸のようにつづく甘い血の網目をたよりにとぎほぐす。わたしの仕事、わたしの冒険。わたしは今日、あなたのために夢を見る。

——十一月の新月の夜、ひとすじの青い光が上空に弧を描いた。いや、光なのかもわからない。深い闇をたたえる空気が一瞬、ただひとすじ薄くなった。十一月の夜空に懸ける願いは叶う。僕は経験的にそのことを確信した。経験的？なぜそんなふうに思わねばならないのだろう。僕はその光といっしか一体となった。なぜだかわからない。わからないように目を伏せた。けれど僕はそれを欲していたのだ。僕は憧れた。激しく、拗けるほどに。餓えた鮮血が黒く塊り嫉妬するほどに。その欲望が見つめる先にあったのは、青と白の透明なセスナだった。空気のように軽くひんやりとしたセスナ。冷たく輝く機体の表面に無数の星々の幽かな光が流れ、高速ですべり墜ちてゆく。機体は急上昇した。僕は祈った。何を？そんなこと知るもん

か。そもそも何かを祈るなんてことがあるのだろうか。存在を懸けて祈る。何かを欲しいわけではないんだ。星の光を地面に散らし、機体は信じられない角度で夜闇を切り裂いた。僕は激しく動揺した。「そんなに好きなら仕方がない」。機体は空中で数回横転をくりかえし、白樺並木の合い間に着陸した。砂埃が十一月の夜の空気をわずかにゆらした。僕は泣いていた。いや、泣いていたのは君かもしれない――

千尋、図書館で血にまみれるの巻

世界中の人々が憎悪を燃やすアメリカの空は思いのほか綺麗だった。それがこの国に来て最初に思ったことだった。世界の嫉妬と嘲笑と怨念をがぶがぶ呑み込み、小学生のような良心で世界を苛つかせ続けるアメリカの地は、あっけらかんと美しかった。いわゆる悪魔的美しさの対極にある。この地では、手の込んだ罫や悪意は地上に生い茂ることを赦されなかった。意地悪すらも正直で、嘘すらもバレバレだった。敵意は良心を盾に相手をまっすぐに貫く。お世辞も悪意も同じだった。ただあっけらかんとしていた。しがらみがなかった。恒星だろうか。誰かが言うように。いや、そこまで崇高でもないのだ。

サンドイッチを食べながら、千尋は五月の空をながめた。随時キャンパスのどこかで開かれ

る小さな学会で余ったランチボックスを今日は運よく手に入れることができた。いろいろな野菜が幾重にも巻き込まれたベジタリアンのためのラップサンド。有機食材百パーセントの文化的良心が詰め込まれ、オートミールとレーズンでできた皿のようにでかいクッキーが、決して再生されることのない豪華なプラスチックフォークとともに付いてくる。工業的ビニールに巻かれた日本のコンビニの薄いハムサンドが意識の隙をみてふと脳裏に浮かぶ。千尋は軽い眩暈を覚えた。ある種の快楽を伴う郷愁と良心の呵責だった。どちらの国の何を懐かしみ、何が後ろめたいのかよく分からない。たぶん後ろめたいのは自身の所在なのだ。いまここにあること。この左うちわ的知識人の良心と健康への近代的希求を一手に背負った食物をタダで頼張ること。環境破壊の元凶でありながらどういふわけかそれとは無縁のこの空の下で。永遠に続くと思われるこの真つ青な空の下で。「自然である限り善であり美しい」という明らかに偽のテーゼをグリーンピースの輩のように思わず叫んでしまいたくなるような、この透明で美しすぎる空の下で——千尋はこの昼の眩暈をひどく愛した。

アメリカの大学人のあいだでは量販スーパー・ウォルマートは悪徳ということになっている。だから私もウォルマートではなく紀伊国屋張り高級スーパー・ホールフーズの有機食品を食べる。そのほうがうまいに決まっている。中だるみ大学院生の千尋は、知識人の符牒をちらつか

せたいほどにまだ幼く、しかもうまいものを拒絶してまで反抗心を見せるほどにはもう若くはなかった。「パンがなければケーキを食べればいいじゃない」。そう私はアントワネット。私はたぶんネオナチやブッシュと同じくらい罪深いのだ。世界でもっとも美しいものを八方美人でここにこしながら奪い去る。暖かくて広くて涼しい部屋、ちよつとアクセル踏めばどこにでも行ける車、巨大な大地をどこまでも愛撫する無料道路、どこにでもふんだんに出てくる水とお湯と電気、まずいと言ったつてつねに必要な量を大幅に超過している食糧、決してリサイクルされないプラスチックの皿たち、日本より客入りが明らかに悪いのになぜか絶対に潰れないスパ。地上で考えうるかぎりの極小ストレス状態がもたらす限りなく義務に近い人の好き。議論はあるだろう。けれどこれは千尋にとってアクチュアリティのあるひとつの風景だった。アメリカに住む人々はみな恐ろしく機嫌がよかった。そういうものが人生にもたらす美味しいものを、なんの理由もなく私は占有するのだ。言っておくが私はアメリカを批判しているのではない。どうしようもなく愛しているのだ。これは懺悔だ。私は快い贅沢が好きなのだ。手に入るものを拒絶する気など毛頭ない。仕方ないのだ。中道左翼のなれの果て。そんなことは百も承知で二十四時間三百六十五日空調ギンギンの図書館に閉じこもる。確信犯。たぶん自分は死んだら地獄に墮ちるだろう。そしたらこの図書館にはもう来られまい。そのときは世界中の本

がクリック一つで手に入るこの空調ギンギンの図書館の一席を、今世界で最も苦しむ誰かにあげよう。そんなものは誰も欲しくはないだろうか。そうであってほしい。ホントのところ、地獄の反吐を滴らせてでも、もういちどここに来たいのだから。

しばしの昼休みを終え、千尋はギリシャ風イオニア式の太くて重い柱をフアサードにもつ人文書館に再び入った。これが日課だった。数年前ひよんなことから他人の金でアメリカ東海岸南部の大学院に来ることになった。専攻は西洋美術史。とはいえ欧州主義がまだ根強い日本の人文畑で育った千尋は、せいぜいヨーロッパ近代美術のことくらいしか知らなかった。再生産性も薄くアメリカとも関係のないこんな輩に投資してくれるとは、殊勝な人々もいるものだった。感謝してあまりある。金に名前がないとはこのことだ。誰に感謝すべきなのかも、何をしていいのかもわからなかった。真のグローバリズムはここに具現する。決定的に無名であること。善意も悪意もすべて無化すること。金満主義万歳。資本主義と共産主義が何十年も対立していたなんて到底信じがたいことだ。金がそんなくだらないイズムのもとにぐずぐずとどまっているわけがないのだ。マルクスほどの男が随分重篤な判断ミスをしたものだ。金がどちらにも与しないことを人は知っている。私のところにおいて。名乗らなくてもいいから。ドア

もノックしなくていいから。このアジアの小島のしがたい研究者の卵のところにも爪の先くらいは触れておくれ。世界をひとつにしておくれ。千尋は朝から晩まで図書館で勉強した。寄付者への恩義や義理でやっているわけではない。それ以外することがなかったのだ。それが一番楽しかった。あきらかに読破の勝ち目が無い大量の本を前にして、毎日少しずつただひたすらに読む。南部の深い緑が空と鋭いコントラストを成すように、千尋の心も本を読むと艶やかで反抗心のある緑色を増して、固い輪郭を描いた。思惟は青い空を超えて遠く漂う。アメリカへの愛と裏切りの証だ。

今日の仕事は十九世紀フランスの点描画家たちの手紙を読むことだった。スーラとかシニャックとかいったぶつぶつで描く奴らのことだ。この図書館所蔵のものと、全米のアーカイヴで集めたものを合わせると、二〇〇〇通ほどあった。ここから博士論文に使えるようなネタをひたすらに拾ってゆく。一週間ほど前から続いている地道な作業で、今日はいまぐすれば手元の資料をすべて読破できるかもしれない日だった。ちょっとした記念すべき日。なにせ人の手紙を読むのはとんでもなく骨が折れるのだ。学問上の必要な手続きのなかでも、もっとも不可解にしてやたらに時間のかかる作業——「一八七三年一月十日パリ。いまのところさして具合は悪くありませんが、頭と全身がやや痒いです。もしパリにいらっしやる機会があれば来ていただ